

# 山鹿素行と『易』

石橋賢太

## 要旨

山鹿素行は、多くの先行研究において、形而上学的言説を批判し、日常重視を主張した思想家とされている。だが、それにより、彼の『易』をめぐる議論が閑却されることが多い。そこで、素行の『易』の論を見てみると、『河図』『洛書』は重視するが、『先天図』『後天図』の方はほとんど取り上げないという特徴がある。それに対し『河図』『洛書』はそれぞれ単一の図で複数の数を表していることから、素行は高い評価を与えている。つまり、素行にとって『易』とは唯一の体系を持つたものなのである。そして、それが「天地」の一なるあり方に対応しているという。素行が『易』の理解を通じて批判しようとしていたのは、人の目から見えることだけから考えることで、「天地」を段階的なものとして捉えることである。ただし、一挙に全体としての「天地」を捉えることを主張しているのではない。あくまで、人に認識できる範囲は限定的であることを自覚し、限定的・個別的に過ぎない、個人の認識を普遍的であるかのように捉えることを批判しているのである。次に、素行が「全体」について述べているものを見てみると、素行は「言語」が「全体」に反するものと見ることがわかる。「全体」に反する「言語文字」のないところから作られているからこそ、素行にとって『易』には価値がある。



はじめに

山鹿素行（二六二二～一六八五）は、一般的に形而上学的言説を批判し、日常重視を主張した思想家として知られている。これは、素行が朱子学を批判する際に、朱子学の抽象的、非日常的言説を攻撃対象としたためであるとされる。<sup>(1)</sup>確かに、素行の著書の中にはそういった言葉が数多く存在する。たとえば、『山鹿語類』において、宋代の学問を次のように評している。

聖學の傳、宋に至つて毎に過高の病あり、故に學者、近を捨てて遠を求め、下に處りて高を窺ひ、心を空妙の域に馳す。陸子が徒、専ら世に鳴り、周・程・張・揚・羅・李、多く儒を表にして、其の標的は高尚に在り。（『山鹿語類』聖學三、雜子、儒家者流、「朱子」<sup>(2)</sup>）

宋代にはほとんどの儒者が、近くのことを見ないで高遠を求め、空虚なことに心を配る誤りにおちいつていた。このような状況をもつて、素行は「是れより周孔の道、疎闊にして、聖人の學、見るべきなし。宋に至りて聖學大變す、其の説、異端に同じ」（『山鹿語類』聖學三、雜子、儒家者流、「周子」<sup>(3)</sup>）と、正当な儒教のあり方から外れてしまったと批判している。このような言葉があることもあり、先行研究において、素行は日常を重視し、形而上学を否定したとされるのである。

本稿でも、素行が日常を重視したということに異を唱えるわけではない。だが一方で、日常重視を取上げること

より、素行の思想の中で閑却されがちになる面もあるのではないか。その代表格ともいえるのが、素行の『易』をめぐる議論である。当然、儒者である素行は『易』『書』『詩』『禮』『春秋』の五経を最大級に評価するのだが、その五経の中でも素行がもっとも高い評価を与えているのが、『易』なのである。素行は『易』について、「聖學は易に盡く」(『山鹿語類』聖學一、致知、讀書、經書、「讀易」<sup>(4)</sup>)といっている。よく知られているように、素行はみずからの学問を「聖學」と呼んでいた。すなわち、素行の学問は『易』に極まるというのである。これを見れば、素行の思想を理解する上で、彼の『易』に対する認識を知ることが非常に重要であることが分かるだろう。

しかし、周知のように『易』とは非常に抽象性の高い書物でもある。陰爻と陽爻の組合せによる六十四の卦、象徴のない方に終始する卦辞・爻辞、形而上学的性格を持つ十翼など、どれもただちには日常生活とは結びつけがたい。そのため、素行の思想を日常重視として理解しようとする、大半の先行研究では素行の『易』をめぐる議論が等閑に附されることになるのである。だが、『易』は素行の学問において極めて重要な位置を占めているのだから、無視したままでは良いはずがない。そこで、本稿では素行の『易』に対する認識を読み解き、それにより素行の思想のあらたな一面を明らかにしていくこととする。

## 一、『河圖』『洛書』をめぐる議論

まずは、素行が『易』について述べている言説を見ていくこととするが、その前に把握しておかななくてはならないのが、素行の『易』の理解は朱子(一一三〇～一二〇〇)のそれを踏まえているということである。たとえば、『山鹿語類』中の『易』の項で『河圖』『洛書』について述べている箇所において、素行は三者の言葉を引用している。その

三者とは、『易』の「繫辭傳」、孔安國、劉歆なのだが、これは、朱子の『易學啓蒙』とまったくおなじである。<sup>(5)</sup>『易學啓蒙』でもこの三者を引用し、しかもその引用範囲も一致する。これを見れば、素行が『易』を論ずるに際して、朱子のことを参照していることは明らかである。これは裏を返せば、朱子の『易』理解と異なる部分には、素行の独自性が表れていることを意味する。

それでは、『易』の理解において、両者のもつとも相違する部分はどこか。それは、『先天圖』『後天圖』の扱い方である。「先天」「後天」の語は「繫辭傳」に由来する。この「先天」「後天」の言葉に従って『易』の卦を一つの図に配したのが、『先天圖』『後天圖』である。この両図はそれぞれ八卦乃至六十四卦を東西南北の方角と対応させているが、両図はそれぞれ卦の配し方が異なっているため、当然その方角に対応する卦も異なっている。たとえば、『先天圖』では「乾」の卦は南に位置しているが、『後天圖』では北西となっている。また、『先天圖』は伏羲、『後天圖』は文王のものとしてされている。この、「先天」「後天」の考え方は邵康節（一〇一〜一〇七七）からはじまり、朱子も『易本義』や『易學啓蒙』で採用するなどして、その価値を認めている。朱子は、この両図を『河圖』『洛書』とともに『易』の学問の一部として重視していた。

ところが、素行の場合は『河圖』『洛書』は重視するのだが——これは朱子から引継いだ思想だと考えられる——『先天圖』『後天圖』の方はほとんど取上げない。『山鹿語類』の中には「伏羲の一圖なるもの」（『山鹿語類』聖學二、致知、讀書、經書、「讀易」）という言葉もあり、『先天圖』の存在自体は否定していないとも考えられるが、朱子のように『先天圖』『後天圖』をことさらに取上げることはない。ここには、素行の『易』理解の特色が表れているのではないかと考えられる。そこで、まずは素行も採用している『河圖』『洛書』についての論を見ていき、次に『先天圖』『後天圖』についての論を見てみよう。

まず、『河圖』『洛書』についてであるが、この両図はどちらも数について、「陰陽」との関連とともに表している図である。どちらも「陽」である奇数を白、「陰」の偶数を黒の点で表し、『河圖』は一から十、『洛書』は一から九の数をそれぞれの位置に配している。素行は、「河圖・洛書の説、疑うべからざるなり」（『山鹿語類』聖學二、致知、讀書、經書、「讀易」<sup>(8)</sup>）といい、両図のことを強く信賴している。何故この両図に高い評価を与えるのか。素行は次のようにいう。

師曰く、繫辭傳に曰く、「河、圖を出し、洛、書を出し、聖人、之れに則る」と。是れ聖人天地の自然に感じて易を作る所以なり。河圖洛書の圖たる、一箇の龍馬神龜、此の圖を負ふ。其の象、只だ數點の觀るべきのみ。此の象數、天地人物、陰陽五行生成の事、言はずして既に相具はる。聖々相續ぎ、易の書、全し。而して其の源流始末、此の圖の象數を出でず。後人作為の圖説、年を同じうして語るべからず。凡そ河圖・洛書、一圖の間、數を以て差別を為す、而して根を互にす。生成相因りて太極を一にするなり。是れより萬別の相生、又此の中を出でず。周子の圈々並べ置きて其の説を作為するが如くならんや。（『山鹿語類』聖學十一、大原、「論濂溪太極圖」<sup>(9)</sup>）

素行は周濂溪（一〇一七～一〇七三）の『太極圖』と比較しつつ、『太極圖』より『河圖』『洛書』の方がすぐれているとしている。それは、『太極圖』が「無極」↓「太極」↓「陰陽」↓「五行」↓人↓物を複數の図として連ねているのに対し、『河圖』『洛書』は複數の数を一つの図で表しているからである。この、複數のものを単一の図で表すことが、『易』と通底するといふ<sup>(10)</sup>。これが、素行が『河圖』『洛書』を賞賛する理由である<sup>(11)</sup>。

それでは、素行が『先天圖』『後天圖』を採らない理由は何だろうか。この両図について、素行は次のようにいう。

竊に案ずるに、文王・周公・孔子に先天後天方位の差別圖説なし。（中略）邵氏、先天・後天の方位差別を説きてより、伏羲・文王の易、兩般にして、後世以て附益し來る。夫子、未だ之れを論ぜず、何ぞ後世臆説を以てせんや。（『山鹿語類』聖學一、致知、讀書、經書、「讀易」<sup>(12)</sup>）

両図は「先天」を伏羲、「後天」を文王のものとするので、両者を二つのものに分けてしまおうという。つまり、二種の『易』があるかのようにしてしまうのである。素行は、『易』が唯一なる体系を持ったものである点を重視していたということが出来るだろう。だからこそ、『河圖』『洛書』が単一の図で複数のものを表していることを評価し、複数の『易』が存在するような印象を与える『先天圖』『後天圖』は採用しなかったのだと考えられる。これを踏まえ、素行が『易』のどの点を評価しているのか見てみよう。

師曰く、伏羲の卦を畫するや、天地萬物の象に因りて這の理あり、故に天地の大なる、萬物の區なる、窮むべからずして、易を以て之れを盡すべし。易の象數、又盡すべからずして、天地萬物を以て之れを盡すべし。故に易は天地に先だち天地に後るるなり。天地象を垂れ、聖人述作して、聖學全く成り、人物生を遂ぐ。（『山鹿語類』聖學二、致知、讀書、經書、「讀易」<sup>(14)</sup>）

素行は、『易』が「天地」と完全に対応するものであるという。先に見た、『河圖』『洛書』と『先天圖』『後天圖』との議論からすると、唯一なる『易』に対応しているということは、「天地」もまた唯一であることになる。よりただしきくえば、唯一なる「天地」との対応を重視したからこそ、『易』の唯一性を強調したということだろう。そのため、

別の箇所では「能く天地に通ずるの聖人、天に先だち天に後れて而も一天地の則のみ」（『山鹿語類』聖學十一、大原、「辨或問道原説」）<sup>(15)</sup>ともいつている。「天」に先だっても、後れても、重要なことは「一」なる「天地の則」に従うことなのである。先だつか後れるかで、「天地」が二つになるのではない。

以上の考察により、素行が「一」なる「天地」に対応するものだからこそ、『易』を評価していることが明らかになった。だが、「天地」が「一」であるとは、果たしてどういうことなのか。そもそも「天地」が複数存在することなどあり得ないのではないか。少なくとも、素行が批判する、宋学の諸儒の中でそのような主張をした者はいないだろう。それでは、素行は何を批判し、みずからの『易』の解釈を作り上げたのか。素行の批判の矛先を知ること、彼の『易』の論に対する理解もより深まるのではないかと考えられる。そこで、次節では素行が本節で見たような議論を通して、素行が何を批判しようとしていたのかを考えることとする。

## 二、「高遠」への批判

前節の考察を受け、本節では素行が『易』の解釈を通して、何を批判しようとしていたのかを考えていくこととする。

ところで冒頭で見たように、先行研究では、素行は日常から遊離した、形而上学的言説を批判しているといわれていた。これもまた冒頭で述べた通り、本稿としてもその見解自体には異論はない。

ただし、ここで考えなくてはならないのは、日常から遊離しているとはどういう意味なのかということである。もし、この「日常」なるものを人の目に見える範囲だけを意味しているとすれば、素行の考え方と齟齬をきた

すことになる。何故ならば、素行は『易』の論を通して、人の目に見えることだけから「天地」を捉えようとすることを批判しているからである。

師曰く、夫子、易を論ずるに太極を以てし、理氣妙合太極して、此の一箇裏に六十四卦、三百八十四卦、其の象數、悉く具はる。已に兩儀・四象・八卦を發するに及び、終に六十四卦に迄る。人皆其の著明にして形あるを執りて、而して冲漠無朕の時、這箇の太極なることを知らず。故に或は理便ち太極、性便ち太極と曰ひ、次序を立て太極を論じて天地の先と為すに至る。（『山鹿語類』聖學十一、大原、「論易有太極」<sup>(16)</sup>）

素行はここで、「冲漠無朕」すなわち人には認識不可能な領域に、すでに『易』のすべての卦爻がそなわっているという。そのため、人の目から見ることだけから考えようとすると、「太極」に対する理解を誤るといふ。いうまでもなく、「太極」とは『易』に由来する言葉であり、周濂溪や朱子が万物の生成の根源としたものである。ここで注目すべきは、その「太極」に対する誤解として、「太極」を論ずる際に「次序」を立てること、つまり段階的なものとしてしまふことを挙げている点にある。前節で見た、「一」なる「天地」を強調していたのも、「天地」を段階に分解して捉えようとするこのアンチテーゼだといふことができる。

この、段階によつて「天地」を理解しようとすることへの批判は、前節で見た『河圖』『洛書』と『太極圖』との比較でも見えた考え方である。つまり、『易』の論を通して見ると、素行は「天地」を段階の存在しない、一段のものとしていることが分かるのである。

しかし、それでは何故、目に見えることだけから考えようと段階的な見方になつてしまふのだろうか。

然して生と行と合して一と為る底は、太極の謂なり。太極未分の時、象數悉く具はつて闕如する所なく、此の裏面、先後次序の謂ふべきなし。故に天地人物、只だ一氣にして、共に出生し來るなり。若し先後次序を言はば、則ち第二義に落ち、作為造設に涉り了る。是れ天地自然の道なり。今、民生日用を以て之れを謂はば、乃ち已むことを得ざるの言あり。是れ兩儀を生じ四象を生ずるの謂なり。故に日用流行底、未だ嘗てその次序なくんばあらず。(『山鹿語類』聖學七、五行、「辨或問五行說」)<sup>(19)</sup>

「天地」には本来「次序」は存在しないが、人の生活世界には「次序」がないわけにはいかないという。「繫辭傳」において、「太極」↓「兩儀」↓「四象」という順番がいわれているのも、このためだとしている。つまり、「天地」自体には順序はないのだが、人は順序によってしか認識することができないのである。だから、人の認識可能なものから「天地」を捉えようとすると、段階にならざるを得なくなる。ここにおいて、素行の思想では段階のない自然の「天地」と段階によるしかない人の生活世界という二重の構造があることになるのである。

そして、素行が日常から遊離することを批判しているということは、人は段階によってしか認識できないという前提に立つことを求めているということでもある。だが、それならば段階によって、周濂溪や朱子のどこが間違っているのか。それは、彼らがあくまで人に認識可能な範囲という、先の構造でいうところの片面だけしか見ていないからなのである。本来の「天地」とは異なる、限定的なものに過ぎないにもかかわらず、あたかもそれが「天地」全体に通用する、普遍的なものであるかのように見做す点を素行は批判しているのである。

ここで、素行が強く批判する「自得」についての論を見てみよう。

愚謂へらく、學は必ず自得を立つべからず。自得すれば乃ち晝られて進まず。所謂學者の自得は多く意見に落  
して、猶ほ異端の悟覺を言ふがごとし。（中略）少しく自得を立つれば、乃ち意見理を壓し、聖教私に陥り、下問  
を恥ぢ、高話に甘へ、無星差寸の量を以て事物を充つ。是れ邪說暴行の世を誣ひ民を惑はすなり。自得の説、最  
も畏るべし。後世、學者の蔽、此れより大なるはなし。（『山鹿語類』聖學二、致知、学問、「學蔽」<sup>19</sup>）

「自得」とは、みずからの力で認識を得ることをいう。素行はこの引用文に限らず、たびたび「自得」を批判してい  
る。ただ、「自得」を批判しているといっても、みずからの手で何らかの認識を得ること自体を批判しているのではな  
い。素行が批判しているのは、誤れる認識を押し通そうとすることにある。つまり、あくまで個人による、個別的なも  
のに過ぎない認識をあたかも普遍性があるかのように捉えることを批判しているのである。

無論、すでに見たように、素行の思想では「天地」を全体として一挙に認識することはできないのだから、認識の  
個別性を超越することはできない。そうではなく、自己の認識があくまで個人的・個別的なものであることを理解し  
なくてはならないのである。

そして、ここから素行が日常から遊離することを批判する、その内実も見えてくるだろう。素行が批判しているの  
は、個別的な認識に過ぎないものを、そのことを忘れてあたかも普遍的であるように捉えることなのである。従って、  
素行がいつているのは、先行研究でいわれるような、所謂形而上学の批判なのではない。むしろ、素行はこの世界に  
存在する、目に見えない要素を重んじていたといつて良い。だからこそ、素行は日常から遊離することをきびしく批  
判していたのであって、多くの先行研究ではこの点が見えていないといわざるを得ない。

### 三、『易』と「全體」

前節の考察により、素行が個別的なものを普遍であるかのように捉えることを批判していることが明らかになった。しかし、前節の考察がただしいとすれば、必然的に次のような疑問が生じる。それは、人には「天地」を段階によって部分的にしか認識できないのであれば、どうして素行は部分を越えた全体としての「天地」ということがいえるのか、ということである。

この疑問を考えるために、素行が「全體」について語っているものを見ることにする。

師曰く、聰明睿知、思うて通ぜざるなき者は聖人なり。人の大原は聖人なり。聖人の大原とする所は天地に在り。聖人の道、更に造作することなし。乾坤又簡易なり、而して分殊あり次序あり。學者、言語を以て聖人を觀て其の實を認めず、言を待たずして著名なることあるを知らず。夫子曰く、「予れ言ふことなからんと欲す、天何をか言ふや、四時行はれ百物生る」と。是れ直に全體を指して日用造作することなきの謂なり。若し言語を認むるときは、「天何をか言ふや」の語に因つて、又手を下し工夫造作して訛謬に陥つて終に高見を為すに到り、異見于に立ち、異端于に溺る。夫子を以て師と為し親炙するを、猶ほ日用を棄てて異問を為し異言を求む。人の道に遠ざかること、此の如し。（『山鹿語類』聖学十一、大原、「論道大原」<sup>(20)</sup>）

素行は、「人」が「高見」、すなわち高遠なものの見方になってしまふ要因は「言語」にあると考えている。「言語」に

よって認識をしようとすれば、「天地」にもとづいている「聖人の道」と背反することになるという。その「聖人の道」とは、『論語』における孔子の言葉のように、直截に「全體」を指している。そうであれば、素行にとって「言語」とは「全體」に反するものであることになる。

しかし、「言語」が「全體」に反するとはどういうことが、このような例の一つとして考えられるのが、『配所殘筆』における、朱子学や仏教に対して素行が感じた次のような違和感だと考えられる。

或は仁を體認するときは一日の間に天下の事、相濟候と存じ、或は慈悲を本に仕候へば、過去遠々の功德に成候とまで申候て、實は世間と學問とは別の事に成候。（『配所殘筆』<sup>(21)</sup>）

素行は、多くの儒者や仏教者が「仁」や「慈悲」をいった言葉だけを守れば良いと考え、実際には現実に対応できていないと批判している。これは、多くの儒者や仏教者が個々の事例の個別性を見ずに、すべてを同一の言葉から捉えようとしているからであろう。つまり、言葉が個別性を見失わせることになるのである。これこそ素行のいう、「言語」が「全體」に反するということの意味だと考えられる。そして、このように「言語」を用いることこそ、素行の批判する、個別の個別性を見失い個別に過ぎないものを普遍であるかのように捉えることにつながっていくことになるのである。

しかし、そのように「言語」の意義を完全に否定することは可能なのだろうか。もし言語を否定するのであれば、世に無教に存在する書物、特に四書五経などの経書も無意味であることになってしまうのではないか。無論、そうはならないだろう。「聖人」から遠く隔たった時代に生れた者たちが「聖人」の言行を知るためには、それらを書記した

書物に頼る以外にはない。そのため、素行も經書の意義を最大級に強調している。そうすると、經書というのは言語で書かれながらも、非言語的だという、相矛盾する性格を持つことになる。

このように考えれば、素行が『易』を極めて重視する理由も理解できるだろう。『河圖』『洛書』の議論に典型的に表れていたように、素行にとって『易』とはまさに「全體」を直截指示しているものなのである。素行はいう。

凡そ文字の詳にすべきなく、言語の盡すべきものなきときは、乃ち象あり數ありて、以て其の蘊奥を著明するに足れり。天地萬物の言語文字なきときは、皆象數を以てその情を發す。（『山鹿語類』聖學二、致知、讀書、經書、<sup>(22)</sup>「讀易」）

『易』とは「文字言語」のないときに、「聖人」が直截「天地」を見て作り上げたものであり、だからこそ価値のあるものである。

さらに、素行は次のようにもいう。

或ひと問ふ、道の大原は學者の趣向を底止して雜駁ならしめざる所以ならば、聖人何ぞ易を以て恆に論ぜずして、唯だ詩・書・執禮を以てするや。

師曰く、日用躬行の實は、是れ學者の急務にして大原の次序なり。彼の易は直に全體を指し淵源を著明するの書にして、盡せり至れり。初學の徒の速に通ずる所に非ず。人各々急務あり、急務を先にして大原を失はざるは、是れ聖人の教ふる所なり。易は聖々相傳へて、是れを以て萬世の師と為す所以なり。故に恆に解かざるなり。（『山

鹿語類』聖學十一、大原、「辨或問道原之説」<sup>(23)</sup>

まさにここにおいて、素行は『易』が直截「全體」を指示するものであることを明言している。『易』はこのように「全體」を指示しているからこそ、通常の言語で書かれた他の経書、『詩』『書』『禮』などよりも特別な位置が与えられている。そして、これこそが、冒頭で見たように「聖學は易に盡く」とまで素行が断言する理由なのである。

ここまで見てくれば、素行が日常を重視しているからとして、『易』の論を取上げないことが誤りであることは明らかであろう。素行には、日常に対する独自のまなざしがあるのであり、そのまなざしにおいて『易』は日常と矛盾するものではないのである。従って、今後素行の思想を研究する上では『易』の解釈に表れる、彼の考え方を念頭に置かなければならないことは明白であろう。

## おわりに

本稿ではここまで、素行の『易』に対する解釈を読み解いてきた。その中で、素行の言語観や「全體」についてなど、これまでほとんど注目されることがなかった議論に焦点を当てることができたのではないだろうか。

ここまでは『山鹿語類』を中心に議論を進めてきたが、最後に本稿の考察が素行の他の著作の読解にも寄与する可能性について述べておきたい。

たとえば、『山鹿語類』より四年後に書かれた『中朝事實』でも「外朝の文字の祖は易を以て本と為し」(『中朝事實』禮儀章)<sup>(24)</sup>といている。『中朝事實』といえ、通常は日本主義のことばかりがいわれ、そのような論は注目され

ない。だが、同書の中には文字についての議論もある。引用では中国の文字のことをいつているが、当然日本の文字にも言及している。本稿での『易』を通しての言語や文字についての考察は、そのような議論を読み解く上で有効になるのではないだろうか。

また、本稿での考察がもつとも有効に働くと考えられるのが『原源發機』である。成立年ははっきりしないが、山鹿流兵学の秘伝中の秘伝<sup>(25)</sup>でもある同書は、「素行哲學の最高峯」<sup>(26)</sup>ともいわれる。だが、同書はその難解な内容のため、これまで十分な研究がされてこなかった。

しかし、『原源發機』及び、素行自身の注釈である『原源發機診解』を見ると象形文字に似たものや、数字をそれぞれの位置に配した独自の図などがある。これらが『易』の学問と類似していることはいうまでもない。さらに注目すべき点は、次のような言葉があることである。

凡そ萬物、皆其の妙あり、盡すに言を以てすべからず。況や天地の機、豈に言語を以て之れを泄すべけんや。(『原源發機診解』上卷)<sup>(27)</sup>

ここでも、素行は「天地」と「言語」との関係に言及している。これは、まさに本稿で見た『易』をめぐる議論と軌を一にしている。つまり、『易』における議論の延長線上に『原源發機』があると考えられるのである。ここでは、これをさらに詳しく述べるほどの準備はないので、これについては今後の課題として本稿を締め括ることとする。

本稿は国文学研究資料館共同研究（若手）「山鹿素行関連文献の基礎的研究」による研究成果の一部である。

〔注〕

(1) たとえば清原貞雄は、朱子学批判に転じた後の素行の思想について次のように評している。「極めて簡易平明であつて何等の奇説もない。斯く簡易平明なのが古聖人の本領であつて、之でこそ何人にも實行し易く、萬人日用に供する事が出来る。後世の儒者の如く、平明なるものをわざと六ヶしく論じ立てゝは古聖人の旨に違ひ、又普通の人には容易に用ゐられぬものになつて終ふ。」（清原貞雄『思想的先覺者としての山鹿素行』藤井書店一九三〇、一五五頁）また、近年のものでは立花均『山鹿素行の思想』（ペリかん社、二〇〇七）において、立花は素行について「朱子が形而上界に想定する究極的一理を否定し、現実界に閉じた所で議論を展開している」とし、朱子学に対抗して「日用」重視の思想を打ち出したとする。そして、次のようにいう。「形而上界に至善なものを想定し、それによつて日用の工夫を道徳的に価値づけようとするのは、日用の工夫それ自体には究極的な道徳的価値を認めていないということである。そういった、日用の工夫の価値を貶めるような形而上的工夫は、道徳の学からは排除されなければならない。そしてそのような道徳の学を實現するには、道徳の学に形而上的工夫が取り込まれてくる以前の、孔子の古に復さなければならない」（二九〇頁）その他、同様の解釈をする研究は枚挙に暇がない。

(2) 廣瀬豊篇『山鹿素行全集 思想篇』（岩波書店、一九四〇）―以下、『全集』と略記―第九卷二六五―二六六頁。なお、『山鹿語類』の引用は基本的には『全集』を用いたが、素行会篇『山鹿語類』（国書刊行会、一九二一）によつて、校合した。

(3) 同右二四〇頁

(4) 同右二七一頁

(5) 「師曰く、易の大傳に曰く、「河、圖を出し、洛、書を出し、聖人、之れに則る」と。孔安國(割注略)曰く「河圖は伏羲氏天下に王たりしとき、龍馬、河に出で、遂に其の文に則りて以て八卦を畫す。洛書は禹、水を治むるの時、神龜、文を負ひて背に列す、數ありて九に至る、禹、遂に因りて之れを第でて以て九類を成す」と。劉歆が云ふ、「伏羲氏、天に繼ぎて王たり、河圖を受けて之れを盡す、八卦は是れなり。禹、洪水を治めて洛書を賜はり、法つて之れを陳ぶ。九疇是れなり。河圖・洛書、經緯を相為し、八卦・九章、表裏を相為す」と  
〔『山鹿語類』聖學二、致知、讀書、經書、「讀易」『全集』第九卷、一七八頁〕

(6) 『易學啓蒙』については、吾妻重二『朱子学の新研究』(創文社、二〇〇四) 第二部第二篇第一章「朱熹の象數易學とその意義」参照。また、朱子の『易』の論については、鈴木由次郎「朱子と易」(『朱子学大系』第一卷、明德出版社、一九七四) 参照。

(7) 『全集』第九卷、一七六頁

(8) 同右、一七八頁

(9) 『全集』第十卷、三八六頁

(10) 『易』は『河圖』『洛書』を参照して作られたとする見方もあるのだが、素行は「聖人の卦畫を為り疇數を為る、何ぞ圖・書の象數を必とせんや」(『山鹿語類』聖學二、致知、讀書、經書、「讀易」、『全集』第九卷、一八〇頁) といひ、そのような見方は取っていない。

(11) 客觀的に見れば、『太極圖』も全体として一つの図と見ることも可能だが、素行はそのような見方は取らない。あくまで複数の図が連なつたものと見る。

(12) 『全集』第九卷、一七六頁

- (13) 同右一七〇〜一七一頁
- (14) 『全集』第十卷、三五五頁
- (15) 『河圖』『洛書』も二つの図なのだが、素行はその点にはまったく触れていない。『易學啓蒙』では『河圖』と『洛書』との関係について、詳しく述べられているが、素行の記述を見るとそのような問題は存在しないかのようである。この点に関しては、今は今後の課題とするしかない。
- (16) 『全集』卷十卷、三六一頁
- (17) 『易』繫辭上第十一章「是故易有太極。是生兩儀、兩儀生四象、四象生八卦。八卦定吉凶、吉凶生大業」
- (18) 『全集』第十卷、三五〜三六頁
- (19) 『全集』第九卷、一二〇〜一二二頁
- (20) 『全集』第十卷、三四九頁。なお、「夫子曰く」とは『論語』陽貨篇「子曰、予欲無言。子貢曰、子如不言、則小子何述焉。子曰、天何言哉。四時行焉、百物生焉。天何言哉」
- (21) 『全集』第十二卷、五九四頁
- (22) 『全集』第九卷、一八〇頁
- (23) 『全集』第十卷、三五七〜三五八頁
- (24) 『全集』第十三卷、一五六頁。なお、『中朝事實』は、『全集』を素行文庫所蔵本によって校合した。
- (25) 石岡久夫『山鹿素行兵法学の史的研究』(玉川大学出版部、一九八〇)参照。
- (26) 『全集』第十四卷、『原源發機』の廣瀬豊による「解題並凡例」(三九五頁)
- (27) 『全集』第十四卷、四四四〜四四五頁。なお、『原源發機諺解』は平戸資料館所蔵本によって校合した。